

はじめに

本学経営情報学部小田壽典教授が2001年3月をもって本学をご退職になる。小田教授が、豊橋短期大学の開学いらい、今日の『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』の編集・刊行にご尽力なされたことに対して、謹んでお礼を申し上げたい。当該研究紀要編集委員会は、小田教授の研究業績の目録を研究ノートとし、併せて簡明な回顧録を本号の巻頭に掲載する。

小田壽典教授は、豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部の前身である豊橋短期大学の開学(1983年4月)当初から本学に勤務され、多くの研究成果を発表し、また学内の学術研究の向上のために配慮を怠らなかった。さらに附属図書館長として施設管理面においても多大の功績を残された。とりわけ『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』の前身である『豊橋短期大学研究紀要』の発刊当初から刊行業務に携わり、1984年第1号から第3号まで編集委員を、第8号から第13号まで編集委員長を務められた。つねに研究紀要の継続的刊行の必要性を説かれ、そして学内の諸氏を励まされ編集の細部まで労力を惜しまず、今日の基礎となる重責を果たされたことに、我々は衷心から感謝の意を表すものである。筆者も、小田教授のもとで編集委員を務め真摯な指導を直接仰いだ。小田教授なくしては、我々の研究紀要は存在し得なかったといっても過言ではない。なお経営情報学部でも新しく『豊橋創造大学紀要』の発刊に力を注がれたことをつけ加える。

小田壽典教授の長年にわたる功績に深く感謝するとともに、益々盛んなるご研究とご多幸を祈念申し上げます。

(編集委員長 伊藤博文)

Kṣanti qilmaq

古ウイグル・トルコ学

小 田 壽 典

出生と禅寺　私は1935(昭和10)年11月21日に愛知県渥美郡二川町大字二川(現在の豊橋市二川町字北裏77番地)の曹洞宗松音寺ながもとに生まれた。父は住職の永元隆法、母の名は「いし」といった。父は養子として岐阜県の各務村おがせ(現在の各務原市)の左高姓の出身で、小学5年のとき松音寺へもらわれてきた。いくたりかの弟子の最年少であったが選ばれて後継者となつたらしい。その父の師僧の連れ合いは終戦後まで健在で石川姓を名のり、のち過去帳にも側室と記されている。おそらくまだ禅寺の權威をはばかって連れ合いは入籍されず、実際子供もなかった。父はやはりいくたりかの弟子を育てたが、私が最初の血縁上の後継者となった。二川北部小学校の4年に、昭和20年大戦の終結となり、その9月21日に母は結核で逝った。まだ寺内には本土防衛部隊の医療班が残留して騒然としたなかで母は軍医にみとられた。それから10年、二十歳、大学の教養部のとき父も脳溢血で倒れそのまま臨終した。この日から住職の実務代行が現実のものとなったのである。

しかしながら宗派の制度は、簡単に住職を引き継げるものではなかったし、さまざまの思惑が働いたことを後で漏れ聞いた。ともかく檀信徒総会が開かれて、いわば「白州」に引き出されたような事態がおこっ

た。わずかに鮮明な記憶のなかに止まることは、「大学卒業後に速やかに住職となる努力を惜しまないこと」を文書で約束することであった。翌年教養学部(京都大学)から文学部史学科東洋史学専攻へ進んだ。

京都の生活　京都には父の妹、つまり伯母がいた。東海宗確という出家名で尼僧として、妙心寺派の明道庵と称する尼寺に住持した。平安神宮の裏手にあたる、岡崎の郵便局から黒谷さんの門前へ向かう路地にあった。ただ常時お師僧に仕え、一乗寺の下り松(宮本武蔵の決闘場で有名)を少し登ったところの、圓光寺の尼僧道場に居た。私はほとんど留守の明道庵に止宿させてもらった。父の実家、左高家は江戸時代に庄屋であったが、明治の濃尾地震で壊滅的被害にあい苦難の道を歩んだ。伯母も8歳の時分に近くの臨済系の尼僧道場に預けられ京都に出たのである。明道庵の裏手に出て神楽坂をくだると吉田の大学がみえる、この尼寺に、無料で滞在できたことが大学生生活を続けられる最大の理由であった。週末には二川へ帰り寺務をこなしたものであった。

文学部に進学した1957年に新たに東洋史学の第4講座として西南アジア史学が発足した。概論は宮崎市定・足利惇氏の両教授によって始められた。内容はイランのサ

サン朝史とソグド民族の活動であった。西アジアの諸言語も履修科目に載った。私は羽田明教授のトルコ語を選んだ。ただし専門科目の大部分は漢文系統で単位を満たさねばならなかった。私の卒論試問委員は宮崎市定・田村実造・佐藤長・足利惇氏の諸先生だったと記憶している。何と豪華な顔ぶれであったことか。ちなみに諸先生はみな各学士院賞を授けられている。永平寺安居の後は再び大学にもどるか、と宮崎先生に問われたのはこのときであった。大学院への進学手続きと同時に大本山永平寺安居のために一年間の休学を願い出たところであった。翌年(1961)には書類上で松音寺住職となったが、京都へ週二、三回通うことも難儀なことであった。しかしながら大学院の研究室はようやく戦後の困難から落ち着きをとり戻した時代にはいていた。龍谷大学における「大谷探検隊将来ウイグル字資料目録」の作成や満州語で解説された中国清朝の辞書『五体清文鑑』のカード整理、さらには西域史のための明実録抜粋読書研究会など、次々に課題が提供されてめまぐるしくも恵まれた時期にあたった。そのためにウイグル(トルコ)語のほかに満州語・チベット語・モンゴル語、のちには中世ペルシア語パフラヴィーまで手をだした。モンゴル語のほかは、ほとんど個人教授に近い状況であった。急な寺の行事のために授業を欠席し、天理大学から通って来ておられた満州語の今西春秋先生が教室で待ちぼうけたと聞かされて恐縮した。上記大谷隊西域資料のために大宮の龍谷大学附属図書館に通い、ハーバード大学へ出かけた山田信夫さんが羽田先生に託した、完成に近い目録ノートを点検して文書断片の大きさなどを計測する作業は学部学生のと

きであったと思う。これがトルコ語仏教研究の端緒となった。大学院に復学した翌年(1962)にハンブルグ大学のアンネマリー・フォン・ガバイン女史が来講し、羽田・藤枝両教授の講義時限をふり替えて3か月間の古代トルコ語演習が行われた。毎時間10人前後の聴講者があった。ある日ガバイン女史に大谷資料を点検して頂くために、羽田先生におともをして同席した。またとない機会であって、研究中の大谷資料「ウイグル文殊師利成就法の断片一葉」の点検をガバインさんに仰いだのである。博士課程の研究テーマは「古代トルコ語仏教文書の歴史的研究」としたが、偽経の『天地八陽経』にもっとも関心があった。

山田信夫さんがハーバード大学から帰国された。そして夏休みに野尻湖畔でユーラシア研究の集会を提案したいというので、京大の東洋史研究室で、若松・間野そして私くらいであったか、宛名書きをした。野尻湖ホテルの看板に最初「山田団体」と掲げられたこの「野尻湖クリルタイ」はいまや(2000年)第37回を数えるにいたった。第3回目(1966)に「ウイグル文トルコ語天地八陽神呪経の写本について」発表させていただいたのが私にとって最初の学界デビューであった。そしてこの年はたいへんなことになった。寺の事情は大学では話せないし、寺の世話役には大学のことはなるべく触れないで時間を使い分けることだった。博士課程は単位取得、満期退学となったけれども、研修員として猶予期間が与えられた。しかしまだそのころは博士論文を書くのはおこがましいことであった。一方豊橋では正式な住職として晋山と結制安居を秋に挙行することが決定された。4月には次男が生まれて家内が中学教員を退職す

ることで折り合いがついた矢先、田村先生からトルコ政府留学生試験を受けよという電話があった。一週間後であるというので、急遽、田村先生のご自宅へ伺い帰途大学の診療所で健康診断を受け、申請書類を整えた。あまりにも急であったのは私が本命でなかったにすぎないが、イスタンブル大学のトガン教授に必ず学生を送り込む約束だったようだ。寺の晋山結制を9月25日に早め90日間の制中安居を“トルコで”ということにして10月なかばにはイスタンブルにいた。あわただしい準備であったために7月の野尻湖クリルタイ発表の上述資料類をも荷造りのなかへ入れてしまった。この荷造りが自分の研究進路を決定づけたともいえることは、多くの偶然が幸いしたからである。

イスタンブル留学 トルコ政府奨学金留学生の受入は、前年にはじまり、私は第二回目(1966-1967教育年度)にあたった。東京青山のトルコ大使館において文化担当書記官のオルハン・テュレリ氏の試問があって許可された。受入先はイスタンブル大学文学部史学科、一般トルコ史講座のゼキ・ヴェリディ・トガン教授であった。副指導教官、アフメト・ジャフェロウル教授(トルコ言語文学科)がついてくださった。このように書けば、首尾まことに上々で何事もうまくいったと思われるかもしれない。イスタンブルでの生活上の雑事は、前年度に来られた永田雄三氏(現明治大学教授オスマン・トルコ史学)のおかげで苦労しなかった。彼が繁華街の路地にあったアルメニア人老夫婦のアパートに案内してくれた。トルコ語で部屋のことをオダという。小田がオダを探しにきたといって大笑いして、ここで一年間下宿することになった。

月額300リラ(奨学金800リラ,1リラ=40円)だった。私にはトルコ語も英語も話し言葉はまったく無言の行に近い状態であった。ジャフェロウル教授は、ドイツ語かまたはフランス語はといわれたが「だめか?そうか」。それもバスのなかで、なかば永田氏の通訳つきであった。博士課程受入の試験が10月中に行われた。問題はバルトルドの『モンゴル侵入以前のトルキスタン』(Turkestan down to the Mongol invasion)の本が与えられて、指定されたウイグル族に関する一節を日本語訳せよであった。トルコ語訳せよといってもできるはずのもでなければ、それが形式的手続きであったにしても内心忸怩たるものがあった。ほとんどコミュニケーションの手段を持たずに入学したのである。トガン先生は「答案は見た」といってくれた。つまりよしいということであった。

主任教授のトガン(A. Zeki Velidi Togan: 1890-1970)先生は、ロシア革命のとき、ウラル地方のバシュキル民族の青年指導者(ロシア名:ヴァリドフ)として大トルキスタン国家の建設を夢見たが、レーニンとの折り合いがつかず、ボルシェヴィキの赤軍に敗れてタシュケント(いまのウズベキスタンの首都)で再起を期した。ついに騎馬でカラクム砂漠を決死の逃避行でイランへ、それからアフガニスタン、インドをへ、ヨーロッパから最後にトルコへ亡命した。少しトルコ語ができるようになったころ、大学門前の書店路地でトガン教授のもとにいることをいうと、中央アジアから来た独立派かと問われたことがある。時間の許す限り手当たり次第に学部講義を聴いた。聴く耳を慣れさせなければ、どうにもならない。多少なりとも予備知識のあるものがわ

かりやすいと考えた。一般トルコ史では「カラハン朝史」(トガン教授)、「^{テュルク}突厥帝国史」(カフェソウル教授)、中世史のために「オスマン・トルコ語」(チェティン・デリン講師)、「オスマン古文書とテキスト演習」(ネジャト・ギョコンチ助教授)、「古代語クタドク・ピリグ講読」(エルギン助教授)、「オルホン碑文演習」(ジャフェルオウル教授)、「現代方言カーシュガリーノアゼリー語講読」(エルギン助教授)などであった。上記ネジャト・ベイは新たにきた我々3人、ドイツと日本からの二人の女性と私のために会話教室を開いて、自宅へも招待してくださいました。彼はドイツへの留学経験があって我々に配慮したが、普通トルコの先生は宗教上の都合もあって自宅にまで招くことはなかったらしい。少し落ち着くと何か新しいことを調べてみたいと、大学裏手のスレイマニエ図書館に出入りして、中国の明代に旅行したペルシア人、アリー・エクベル著『中国記』のオスマン語訳写本を書き写した。何度か通う内に、ソヘイルと名の老紳士が日本人かといって話しかけてきた。ロンドン大学を退職しギリシア語からアラビア語へ翻訳された文献について研究しているというペルシア系人物であった。日本人はみな英語がよくわかると思っているのか、少なくともトルコ語は話さなかった。是非来なさいというので一度だけひとり住まいのアパートをたずねた。コーナーの上に人物写真が飾ってある。これはバハイかという、そうだといって親しみのまなざしをみせた。西南アジア史で最初の卒業生だと自慢した一年先輩の高林藤樹さんが卒論にバハイ教をとりあげ、よく聴かされたので直感的にそう思ったのである。ソヘイルさんは詩人の家系に生まれて、学問

を天職と考え、独身主義をとおしてきた。また私は、いつのことが偶然イスタンブール大学の附属図書館に文献探しにきたとき、在学中二、三回しか行かなかったところだが、その日カードをみていると、職員から日本人かとたずねられた。いまパリのハミルトンという人がきて、ウイグル古写本の収集品をみている。昨年、山田信夫教授が写真を撮っていったが発表されたかどうか聞きたいという。ハミルトン(J. Hamilton)氏とはもちろん初対面だったが、まったく知らない人とは思わなかった。トルコから帰途、名刺をたよりに一夜パリでハミルトン氏の自宅を訪れた。恩師の羽田明さんとはパリで交際があって、かつて一緒に出かけた中華料理屋に連れていってくれた。まだそのころ朝市が立ったので、真夜中道路いっぱい集まってくる青果トラックでごった返しているのを目の当たりにした記憶がある。

彼はアメリカ海兵隊出身で極東裁判の調査官として東京に滞在したらしい。それからトルコで数年間、フランスに来てパリ大学のコレージュ・ド・フランス、東洋部門の研究者となった。内陸アジア学(中国学・トルコ学)の専門家であり、敦煌文献のトルコ語写本の研究中だった。日本語もトルコ語も忘れたといって英語で話しはじめたが、ほどなくフランス語になった。ふと気が付いて、何語で話したらよいのかと問う。私は日本語がよいというと、日本語はだめだと英語で話さず、と、またいつの間にかフランス語になっている。いろいろ話されたように感じたが、結局ほとんど何も私は理解していなかった。1983年国際会議で東京・京都にこられた。すっかり変わった丸の内界隈を懐かしく散策したといった。一

昨年、ベルリンのツィーメ氏の求めに応じて本年(2001)のハミルトン80歳記念論集に投稿し校正中である。

イスタンブルでは、1966年11月に学期が始まると、翌年6月までほとんど休みはない。そのかわりに夏休みは長い。いろいろなグループの日本人仲間でアナトリア旅行を満喫できた。私は12月までには帰国を予定した。1967年12月3日に松音寺で法要を約束していたからである。

上記ベルリンのツィーメと知り合うきっかけもイスタンブルにあった。9月に山田信夫さんが東欧をへてイスタンブルにこられた。こじんまりしたホテルを予約して欲しいというので、二、三のホテルを廻ったが、満員だと断られた。今から思えば、あまり身なりの良くない現地留学生在が予約にいても真剣にとりあってくれなかったのかもしれない。結局アパートの老夫婦に話したら喜んで一日10リラ(400円)で泊めるという。山田先生にはこれで我慢していただいた。雑談のなかで、いま藤枝晃さんが東ベルリンにいるから、早速意向を話したらどうかという宛先を教えてくださいました。宛先はハンガリー人研究者のギョルギ・ハザイ気付け藤枝晃先生とした。私の手紙が到着したときは、すでに藤枝さんはそこから出立していた。しかし翌月であったか、日本からご返事をいただいた。ハザイさんは封書の中身を回送してくれたようだ。そこには東ベルリンへの通路が詳しく書かれていた。ベルリン滞在について別に書いたことがあるので、ここでは省略するが、ともかくベルリンの東洋学研究所で応接して下さったのが、いまは同一研究機関のブランデンブルグ科学アカデミーの正会員となっているペーター・ツィーメ教授

であった。

トルコ語講師 帰国後、研修期間が少し残っていたので、大学へ再び通うようになった。大学院の研究会であったか、北京への短期留学生の帰国報告会があり、北京大学の教授と学生が一斉にトラックへ乗せられてどこかへ行ってしまった話があった。文化大革命の始まりだったのである。一方我々のところにも学園紛争の火の手があたりだしていた。

学園紛争のなかで羽田先生は教養部長の職にあり学生との団交などのために体調を崩されていた。私は学生封鎖の学内で古代トルコ語の突厥碑文講読の研究会を行うことができた。一方、上賀茂神社に近い羽田先生のご自宅の庭先にあった、京大文学部中央アジア研究所、普通、羽田記念館といていたところで、岩波講座『世界歴史』の西アジア中世編のオスマン・トルコを担当された羽田さんの研究会でイスタンブルから持ち帰った史料の読み合わせをし、また個人の仕事としてアリ・エクベル『中国記』の邦訳にとりかかった。紛争の終焉するころ、1970年に京大文学部の史学科に西南アジア史学が独立した。必修語学アラビア・ペルシア・トルコのうちトルコ語(初級)を講師として担当することになって10年間、1980年まで、途中から中級(オスマン語)を兼ねた。

ところで、永田雄三氏がまだイスタンブルにいたころ、ウイグル・トルコ語の「文殊師利成就法の断片一葉」について日本語論文をトルコ語に訳して送り、ジャフェロウル教授に点検してもらおうと思った。ところがジャフェロウル先生はすでに在世せず、助手のセルトカヤ(現教授)にわたしてくれた。多分これが機縁となってイスタンブ

ル大学文学部トルコ学研究所の主宰する国際トルコ学会(第二回 1976)への招待が届いた。東ベルリンで調査したウイグル文八陽経の言語について発表した。このときは10日間ほどの東方旅行を試みた。首都のアンカラをへて東部のエルズルムからバスで、ノアの方舟伝説のアララット山麓を越え、さらにイランのタブリーズ経由でテヘランまで行った。バスには、およそ10か国、ヒッピーを含む40人くらいが乗り合わせた。イランはパフレヴィー王朝の最後の繁栄期だったようにみえた。テヘランには京大の西南アジア史講座の主任になられた本田実信教授の駐在研究所があった。イスタンブルには、第三回の国際トルコ学会(1979)も参加した。そのときは続いてパリで中央アジア探検隊のペリオ生誕百年記念国際学会が開かれた。ドイツの学者は東側だけが参加し、東ベルリンのペーター・ツィーメに13年ぶりに会うことができた。そのあと西ドイツに向かい、フランクフルトからギーゼンのレーボルン氏のところに立ち寄ると、翌日龍谷大学の百濟康義氏と落ち合い数日行動をとともにした。

ガバイン女史の愛弟子であったレーボルン氏は招聘研究員として京都に滞在したことがあり、知り合うことになった。彼は古代トルコ語辞書をライフワークとし、三蔵法師玄奘の研究家でもある。このような知遇から1981年ハンブルグ大学のガバイン教授80歳記念学会に招かれた。その前年であったか、ツィーメもまた大阪大学の山田教授の招聘研究員として、おもに龍谷大学で大谷探検隊資料の研究にきていた。私は羽田記念館におけるツィーメ氏の講演実現をお願いしていた。幸いに主任の本田実信教授の企画で春秋年2回の研究例会が発

足し、チベット学の佐藤長教授とツィーメ博士による第1回例会(1980年春)が実現した。ツィーメの演題は「ウイグル木版仏典について」であった。いまこの例会は40回をこえる。このころ、もっとも充実した研究に取り組むことができたのは私には幸運であった。ツィーメからウイグル文天地八陽経の現存ベルリン写本の全写真を提供していただいたし、新しく発見された断片群の発表を許されたのである。なお藤ノ花学園より豊橋短期大学の教員要請の打診があったのはドイツへの旅行中であつたので、帰国して早速承諾することができた。

京都では教養学部でも一年間講義科目を受け持ったが、同じことを二度繰り返すわけにもいかず、私には限度にきていた。このたびの要請はたいへんありがたいものであった。豊橋短期大学の開学年(1983)に東京・京都において第31回アジア・北アフリカ人文科学国際会議があった。日本ではじめて行われる大がかりな会議であったが、前日(8月31日)に韓国旅客機のソ連軍撃墜事件がおこった。その夜会場のロビーではソ連圏の中央アジアからきた人びとの間に動揺が走った。「たいへんなことだが、我々は政治軍事とは無関係だよ」という主旨のトルコ語が聞こえてきた。

本学のこと 新しい豊橋短期大学では、図書館長の役職をいただいた。いくつかの新しい認識もえた。たとえば、印刷業界では活版印刷は終焉し、写植印刷から電子印刷へ近づいていた。そして我々にもパソコンに手が届くようになった。私は古代トルコ語という特殊な文字表記に関心があつて文字盤(フォント)に興味をもった。最初中学生だった私の三男(小田広樹)がベーシック・プログラムで新聞に載るゲーム・ソフ

トを作っているのをみて思いついた。試行錯誤を繰り返しながら複雑怪奇なプログラムを作らせたものに基づいたのが『豊橋短期大学研究紀要』第6号(1989)と第8号(1991)に掲載したトルコ語文字盤論文である。足掛け6年もかかった。パソコンに内蔵された機械語も利用したベーシック・ソフトだったので、新しい機種にはまったく対応しなかった。また残念ながら私自身はプログラムに関する知識は持たなかった。

山田信夫教授から古ウイグル俗文書研究会への参加の強い働きかけがあった。いまにして思えば、たいへんなご配慮をいただいたのである。大阪大学を停年退職後、山田教授は間もなく急逝された(1987)。そこで後継者の森安孝夫を世話役に、梅村坦と私、新たに東ベルリンのツィーメも加わって、古ウイグル文契約文書の遺稿集の編集・出版を目的に、研究会が続行された。私は古ウイグル文献目録と契約文書類のパソコン入力をひき受け、上述の文字盤ソフトを使った。研究会の資料ためには十分役に立った。しかし出版物のテキスト表記は差し迫った問題であった。最後の段階にきてパソコン・プリンターのドット印刷を版下にするのは躊躇された。そのとき、マッキントシュのポスト・スクリプト文字盤に対応する特殊文字の作成が可能なことを印刷業者から教えられた。幸いにも上記文字盤のデータを利用し、短期間で遜色のない電子印刷のために、ポスト・スクリプト文字盤をこしらえたのである。おかげで山田教授の大冊(大阪大学出版局 1993)は新聞にもとりあげてもらうことができた。本学の紀要に発表した論文の特殊文字はすべてこれを使っている。また労せずしてアドビのPDF(インターネット)で表示でき

るのはたいへんありがたい。

1990年代は、ガバイン教授追悼記念学会(ベルリン1994)、トルコ言語集會(アンカラ1996)、そしてアジア・北アフリカ研究国際會議(ブタペスト1997)に参加できた。ブタペストからユーゴのコソヴォ自治州、プリシュティナとプリズレンへ旅行したことは、プリシュティナ大学の畏友ニメトラフ・ハーフィズ教授のおかげであった。そのときハーフィズ夫人の出身地、モスタル(ボスニア・ヘルツェゴビナ)の悲劇はもうごめんだと話があった。しかるに二年後悲劇は起こった。何代も住み慣れたトルコ系の人びとはすでにその地を離れはじめていた。トルコのアンカラで刊行されている学術雑誌『トルコ言語研究』にしばしば、私の英訳またはトルコ語訳の論文を掲載して下さったのは、タラト・テキン教授とメフメト・オルメズ助教授のご厚意によった。またベルリンの帰途に訪れたサンクトペテルブルクの東洋学研究所ではトゥグーシェヴァ女史の口添えで、ウイグル写本を閲覧できた。12月(1994)という時期に訪ねたその研究所の前を流れるネヴァ河の流水は、私には珍しく、すばらしかった。

およそ四十年間にわたる国内外の諸先生をはじめ、同僚、研究者、友人や後輩との出会いに随喜し、励まされてきたことに対して深甚の感謝をしたい。

この十年、アジアの情勢は急速に進展してきた。本学の経営情報学部における主要な講義科目は「アジア諸民族史」で、とくに専門とするトルコ民族を中心テーマとした。トルコ民族はバイカル湖に注ぐセレンガ・オルホン・トーラ河畔に興起した。歴史に名を残すおよそ2000年間にわたり、いまのモンゴリアから天山・パミール山系の

地方へ、さらに小アジア半島まで移住した。民族の発展と流浪，融合と独立を繰り返しながら，歴史に多くの教訓を残したのである。おそらく二十一世紀は雌伏を余儀なく

されたアジア諸地域の雄飛の時代となろう。それは，アジア諸民族の内部から発せられる活力のたまものである。

小田壽典 ODA Juten (旧姓：永元 Nagamoto)

著 作 目 録

A. 古ウイグル テキストの研究・研究ノート

(共編著)

1. 山田信夫 YAMADA Nobuo 著，『ウイグル文契約文書集成』3巻 (*Sammlung Uigurischer Kontrakte*) I: 588+11p.; II: xxi+330p.; III: 160 Tafeln. 編者：小田壽典・P. Zieme・梅村 坦・森安孝夫，大阪大学出版会，大阪 1993.

(論文)

2. 「ウイグル文 文珠師利成就法の断片一葉」『東洋史研究』33-1 [1974] 86-109, pl. 1.
3. 「トルコ語本 八陽經写本の系譜と宗教思想的問題」『東方学』55 [1978] 104-118. Cf. “Der Manichäismus in Iran und Zentralasien von H.-J. Klimkeit”. *Japanische Studien zum östlichen Manichäismus* (Studies in Oriental Religions 17), Wiesbaden 1991: 14-15.
4. “Eski Uyurca Säkiz Yükmäk Yaruk Budist kitabına ait notlar”. *Çevren* (Priştine), 6-4 [1979]: 15-24. Cf. The Second International Congress of Turcology, İstanbul, Oct. 6, 1976. Program: 5.
5. “Eski Uyurca bir vesikanın budizmle ilgili küçük bir parçası”. *Türkiyat Mecmuası*, 19 [1980]: 183-202, pl. 3. (2のトルコ語版)
6. “Eski Uyurca’da bulunan Hint menşeli iki kelime ‘kinari’ ve ‘kint(a)r’ üzerine”. *Çevren* (Priştine) 29 [1981]: 47-52. Cf. The Second International Congress of Turcology, İstanbul, Sept. 26, 1979. Program: 10.
7. “Remarks on the Indic ‘lehngr’ of the Säkiz yükmäk yaruq sūtra”. *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, Band 16), Wiesbaden 1983: 65-72. Cf. Symposium “Neue Ergebnisse der Zentralasienforschung”, Anlässlich des 80. Geburtstages von Frau Prof. Dr. Annemarie von Gabain, von 2. Juli bis 5. Juli 1981, Hamburg 1981: 22.
8. “New Fragments of the Buddhist Uighur Text Säkiz yükmäk yaruq”. *Altorientalische Forschungen*, 10-1 [1983]: 125-142.
9. 「龍谷大学図書館蔵 ウイグル文八陽經の断片拾遺」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』(護雅夫編)，山川出版社，1983, 161-184. pl. 7.
10. 「ウイグル訳八十華嚴残簡 付・安藏と四十華嚴」(共同研究者：百濟康義) 『龍谷大学仏教文化研究所紀要』22 [1983]: (176)-(205) pl. 6.
11. 「ウイグル文 八陽經『大谷氏所蔵断片』追考」『豊橋短期大学研究紀要』1 [1984] 91-100. pl. 1.
12. 「1330年の雲南遠征余談」『内陸アジア史研究』I [1984] 11-24, pl. 1.
13. “On the Uigur Colophon of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra* in Forty-Volumes”. 『豊橋短期大学研究紀要』2 [1985]: 121-127. pl. 1. Cf. Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa 1983, Edited by Yamamoto Tatsuro, I, Tokyo 1984: 340-341.
14. “Uighur Fragments of the Block-Printed Text 《Säkiz törlügin yarumış yaltrımış nom bitig》”. *Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi*, (İstanbul) 24-25 [1986]: 325-346, pl. 5.
15. 「偽經本『天地八陽神呪經』の伝播とテキスト」『豊橋短期大学研究紀要』3 [1986] 61-74.
16. 「龍谷大学図書館蔵ウイグル文八陽經の版本断片」『豊橋短期大学研究紀要』4 [1987] 25-38, pl. 6. (14の日本語版)
17. 「ウイグルの称号トゥトゥンfiとその周辺」『東洋史研究』46-1 [1987] 57-86.

18. 「ウイグル文契約文書の総合的研究」『内陸アジア史研究』(共同研究者：山田信夫・小田壽典・梅村坦・森安孝夫)，4 [1988] 1-35。(『中央ユーラシア史の再構成 新出史料の基礎的研究』(昭和61年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書，研究代表者：山田信夫)
19. 「ウイグル文八陽経写本のS/S字形に関する覚書」『豊橋短期大学研究紀要』5 [1988] 21-32.
20. 「初期トルコ語仏典の年代に関する課題 『マイトレヤとの邂逅』の場合」『豊橋短期大学研究紀要』7 [1990] 35-44.
21. 「ウイグル文トゥリ文書研究覚書」『内陸アジア史研究』4 [1990] 9-26.
22. 「トルコ語『観音経』写本の研究 付編旧『素文珍藏』写本断片訳注」『西南アジア研究』34 [1991]: 1-32.
23. “On *baş bitig*, *’dydış bitig* and *çin bitig* Notes of the Uighur Documents Related to a Person Named Turi”, *Türk Dilleri Araştırmaları* [1] 1991, (Ankara) [1991]: 37-46. (21の英語版)
24. 「ウイグル文ピントゥング嘆願書の訳注」『豊橋短期大学研究紀要』9 [1992] 153-159.
25. “A Recent Study on the Uighur Document of Pintung’s Petition”. *Türk Dilleri Araştırmaları* [2] 1992, (Ankara) [1992]: 35-46. pl. 1. (25の英語版)
26. “Eski bir Türk şiirindeki *Yol Temür* adlı bir zat üzerine”. *Türk Dilleri Araştırmaları* 3, (Ankara) [1993]: 139-146. (12のトルコ語版)
27. “A Fragment of the Uighur *Avalokiteśvara-Sūtra* with Notes”. *Turfan, Khotan und Dunhuang. Vorträge der Tagung „Annemarie von Gabain und die Turfanforschung“*, veranstaltet von der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften in Berlin (9.-12.12.1994), Hrsg. von R. E. Emmerick, W. Sundermann, I. Warnke und P. Zieme. Akademie Verlag, Berlin 1996: 229-243.
28. “Eski Uyğurlarda *ög bitig* üzerine”. *Türk Dilleri Araştırmaları* 6, (Ankara) [1996]: 57-62.
29. 「ブク・ハン伝説のウイグル仏教写本一断片 トゥグーシェヴァ発表によせて」『愛大史学』第7号 [1998. 3] 57-67. (史料紹介)
30. “A Fragment of the Commentary on the *Säkiz yükmäk yaruq Sūtra*”, *Bahşı Ögdisi. Klaus Röhrborn Armağanı*, Hrsg./Yay.: J. P. Laut, M. Ölmez. Freiburg/İstanbul 1998: 233-237.
31. “When was the *Säkiz yükmäk yaruq sūtra* Translated?”, *Türk Dilleri Araştırmaları*, 9 [1999]: 17-28.
32. 「ウイグル佛教寫本に関する年代論 八陽経と観音経」『東洋史研究』59-1 [2000. 6. 30]: 114-171.
33. “A Genealogy of Texts of the *Bayangjing Sūtra*.” *Prof. Dr. J. Hamilton Armağanı* (2001): xx-xx. (印刷中)

(翻訳)

34. P. ツィーメ著 「高昌ウイグル王国の宗教と社会 中央アジア出土，古代トルコ語仏教文献の識語と施主」『豊橋短期大学研究紀要』10 [1993] 213-224; 11 [1994] 135-146; 12 [1995] 285-294; 13 [1996] 99-112; 14 [1997]: 123-138; 15 [1998]: 85-98. (*Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo*, von P. Zieme.)

(パソコンの文字盤)

35. 「古ウイグル トルコ語転写・音訳アルファベットのパソコン・フォントについて」『豊橋短期大学研究紀要』6 [1989] 19-30.
36. 「古トルコ語転写音訳・索引システムの初歩的パソコン マニュアル」『豊橋短期大学研究紀要』8 [1991] 177-184.

B. 内陸アジア・西アジア史関係

37. 「明初の哈密王家について 成祖のコムル経営」『東洋史研究』22-1 [1963] 1-38.
38. 「十六世紀初頭の中国に関するイスラム史料 アリ エクベル著「中国記」の評価をめぐって」『史林』52-6 [1969] 90-111.
39. 「Qutadğu Bilig とイスラム受容」『トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告』(昭和47・48年度)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1974: 14-33.
40. “Historical Studies on Central Asia in Japan, Part I. Uighuristan”. *Acta Asiatica. Bulletin of the Institute of Eastern Culture*, 34 [1978]: 22-45.
41. 「トルコ族のイスラム受容とその性格 神の系譜とメヴルード」『シンポジウム「中東の社会変化とイスラムに関する総合的研究」 報告と討論の記録』6.トルコ分科会，国立民族学博物館，大阪 1980: 135-154.

C. 雑録

42. 「古代トルコ語仏教文書の歴史的研究」『博士課程研究論文要旨』(昭和39年度),京都大学大学院文学部研究科(1965):73-76.
43. 「小アジア トルコ学」『岩波講座世界歴史 月報』(第8巻付録)6[1969]3-5.(『岩波講座世界歴史 別冊(月報)』岩波書店,1982)
44. 「オスマン帝国の盛衰」『大学ゼミナール東洋史』佐伯富・羽田明・山田信夫・布目潮風編,法律文化社,1970:260-262.(分担執筆)
45. 「『中央アジア』1970年の歴史学界 回顧と展望」『史学雑誌』80-5[1971]:248-253.(『日本歴史学界の回顧と展望』(『史学雑誌』第59~95編第5号復刻)17 内陸アジア 1949-85 史学会編,山川出版社,1988:256-261)
46. 「『中央アジア』1973年の歴史学界 回顧と展望」『史学雑誌』83-5[1974]:214-218.(『日本歴史学界の回顧と展望』(『史学雑誌』第59~95編第5号復刻)17 内陸アジア 1949-85 史学会編,山川出版社,1988:265-268)
47. 『新編東洋史辞典』共編,東京創元社,1980.(トルコ史関係分担)
48. 「フリードリヒ シュトラッセ」季刊『東西交渉』通巻10号/夏の号(井草出版)[1984]:11-12.(随想)
49. 「神仙(İrşi Tängri)」『人と人』(山田信夫先生追悼文集),山田信夫教授追悼記念事業会(代表:布目潮風),1989:334-335.
50. 「古ウイグル文書にみる田園都市」『事典 イスラームの都市性』(板垣雄三・後藤明編),亜紀書房,1992:51-52.
51. 「ベルリン・シンポジウム『アンネマリー・フォン・ガバインとトルファン研究』(1994年12月9日-12日)」『東方学』90[1996]:159-167.(学会報告)
52. 「突厥雀によせて」(宮崎市定博士追悼録)『東洋史研究』54-4(付録):15.
53. 「小田壽典著作目録」『内陸アジア言語の研究』XI(1996.7):153-156.
54. 「第三回国際トルコ言語集会 1996年(アンカラ)に参加して」『豊橋創造大学紀要』第1号[1997.3.20]:171-178.(学会報告)
55. 「敦煌・トゥルファン シンポジウム」『東方學會報』No.73(特集=第35回国際アジア・北アフリカ研究会議(ICANAS) その学術的成果と意義 (財団法人 東方学会 / ICANAS 国内委員会 共編):23-25.(学会報告)
56. 「ブダペスト会議からプリシュティナへ」『豊橋創造大学紀要』第2号[1998.3.20]:183-194.(学会報告)

D. 一般書関係

57. 「東西の旅行者たち」『モンゴル帝国』(世界歴史シリーズ 第12巻),世界文化社,1969:174-184.
58. 「オスマン帝国の遺産をめぐって」『植民地時代』(世界歴史シリーズ 第19巻),世界文化社,1970:153-158.
59. 「オスマン帝国の源流 虚構と史実」月刊『シルクロード』(通巻29),4-5[1978]:12-17.
60. 「ウイグル族の発展」『アジアの歴史と文化』7(監修=笹沙雅章 責任編集=若松 寛):(北アジア史). 同朋舎(発売:角川書店 1999年4月20日):49-68.
61. 「イスラームと利子 トルコ事情を考える」『豊橋創造大学紀要』第3号(1999.3):147-154.

E. 辞書項目

62. 「アルトゥン・ヤルク Altun yaruk」『集英社 世界文学大事典』1:153. 東京 集英社 1996.
63. 「クタドグ・ピリグ Kutadgu Bilig」『集英社 世界文学大事典』1:882. 東京 集英社 1996.
64. 「羽田亨 はねだとおる(1882-1955)」『歴史学事典』5(歴史家とその作品):422. 東京 弘文堂 1997.
65. 「トルコ語辞典」『歴史学事典』6(歴史学の方法):457-458. 東京弘文堂 1998.